

## 学生こそ“大学建設”の主役！

高 村 忠 成

ただ今、ご紹介にあずかりました高村でございます。今日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、大変にありがとうございます。

私は、創立者池田先生が「創価大学を設立する」と講演された場に、当時、大学3年生として、1964年6月30日、参加しておりました。そのことが大きな切っかけとなって、創価大学の教員になろうと決意いたしました。

従いまして、私は、開学当初から理事者でもなければ、正規の教員でもなかったわけです。いわば、大学院生から助手になったばかりでした。したがって、大学当局者の正式な見解というわけではありません。それでも、いなそうであればこそ、“大学建設”には現場で携わらせていただく中で、さまざまな先生のお話を伺う機会がございました。

それは、なかなか語り尽くせるものではありません。しかし、今日は、「草創の大学を語る」というテーマでございますので、草創期、池田先生が、どういう思いで創価大学を創られたのか。また、学生たちにどういうことを期待されたのか。そういうことを中心に報告させていただきたい、という気持ちでございます。

創価大学は、今年、創立30周年目です。まだ歴史の浅い大学です。考えてみれば、短期間でよくここまで発展したな、と思います。世界にあって、ハーバード大学は、創立すでに350周年を超えている。中世に大学が出来たわけですが、ボローニャ、パリ、オックスフォード、ケンブリッジ大学等に至っては、すでに誕生から600年を超えているものが多いです。

我が国にあって、東京大学、京都大学、早稲田大学、慶応大学、これらの大学もすでに創立120周年、否、130周年経っています。従って、大学というものを考える時は、大体、50年、100年、200年という単位でみていく必要がある。そうでないと、大学の本当の評価、発展の足跡の判断というものは出来得ないのではないかと思います。

だが、矛盾するようですが、大学というものは、毎日、毎日、瞬間、瞬間の中に、その将来の結果というものが含まれているわけです。従って、現在、大学に携わっている私共が、どのような決意と情熱で大学建設に取り組んでいるか、その生きざま、今の姿というものに、50年、100年後の創価大学の姿が反映されるのではないかと、思います。そう考えると、今日という一日が、いかに重要であるか、というように痛感するわけです。

## 昭和25年に設立構想

最初に、池田先生が創価大学を創られた頃のことを振り返ってみたい。

私は、先生が、創価大学を創った動機には、3つあると思います。すなわち、第1点目は、いうまでもなく、牧口常三郎先生、また、恩師・戸田城聖先生の御遺命達成である。これが創価大学を創った、第1番目の、また、最大の理由かも知れません。

著名なのは、先生の1950（昭和25）年の『若き日の日記』であります。

11月16日（木） 快晴

12時、寝る。室が寒くて、困る。火の気、全然なし。

...

昼、戸田先生と、日大の食堂にゆく。

民族論、学会の将来、経済界の動向、大学設立のこと等の、指導を戴く。

思い出の、一頁となる。

まさに、この時、先生は種々、戸田先生から将来の大学建設構想を伺ったわけですね。

それから4年後、1954（昭和29）年9月に、戸田先生と池田先生は、奥多摩の氷川に研修で行かれました。その折り、戸田先生は将来、八王子をも含むこの方面に大学を創ろう、と場所まで池田先生に明かされるわけです。こうして創価大学は、恩師の遺命実現に向けた先生の努力によって、ついに昭和46年に開学したのです。

第2点目の理由は、当時、60年代から70年代にかけて、戦後の日本は大きな転換期、すなわち高度経済成長期に入る手前にありました。しかし、経済は大きく発展したけれども、一方では、“人間疎外”ということが言われ始めました。大学も国家や企業のための手段となり、“学生不在”という現実がありました。それが、学生たちの大きな怒りとなり、“スチューデント・パワー”の嵐となって吹き荒れたわけです。

先生は、そうした当時の時代状況が投げかけるものを凝視され、その上で「人間教育」、「学生を機械の部品のようにしない教育の大学建設を」という理念を明確にして、創価大

学の建設に入られたわけです。

そして、3点目の理由。これは、いうまでもなく、20世紀から21世紀、いなまた22世紀をも見据えての、将来の人材の育成という目標があったわけです。

ちょうど、このS201教室の前に、一本の枝垂れ桜があります。あれは、1971（昭和46）年2月11日、創価大学の開学を前にして、大学校舎の竣工式の時に、先生が自ら植樹されたものです。

あの時、先生は言われました。「今、時代は、激動の時代に入っている。しかし、どんなに時代が揺れ動いていようとも、その将来を決めるのは人間である。人間を育成するしかない。すなわち、教育こそ時代興隆のカギである」と。

こうした3点が、大学を創った大きな動機、理由ではなかったか、と思うわけでありませう。

そのうえにたって、創価大学のあり方についての先生の先見性はどこにあったかを考えると、私は、次の2つの点ではないかと思うのです。

第1点は、大学の目的として“教育”に重点を置いたこと。第2点目は、学生が“大学建設の主役”であるとして、学生を重視したことであつたと思います。

第1点の先見性ですが、当時、大学といえば、“真理探求”の場とされ、“研究”の場である、といわれてきました。いわば“研究”が重視されたというよりも、それを“隠れ蓑”として、学生に対する“教育”ということが、ある意味では軽視されていたと思います。

確かに、言葉の上では、大学は“研究”と“教育”の場である、という言われ方をされておりました。しかし実質は、ほとんどが“研究”という方向に重点が置かれ、教育は軽視されていたというのが現状だったと思います。

もちろん大学の生命は“研究”であります。しかし、それは“何のため”の研究か。どこに還元されるべきか。やはり、行く先は“教育”にあるわけであります。

この“研究”と“教育”の2つは本来、連動しているはずなのですが、現実的には、“教育”がほとんど軽視されていた、というのが、戦後の日本の大学の姿でした。そうした中であつて、先生は、「創価大学は人間教育の場である」と謳い“教育”を全面的に表に出されたわけです。

今、日本の現状はどうでしょうか。

近年、文部科学省も、学生への“教育”をしっかりとやるように、と見直しを指示し、各大学とも教育に力を入れ始めております。

先生は、すでに、創価大学の開学にあたって、「“研究”を軽視するわけではない。偏るわけではないが、なんといっても、人間教育という“教育”の視点が大学には大事なんだ」

と、言われていたのです。私は、これは実に先見性のある、一つの方角ではなかったか、と思うわけであります。

第2点目の先見性は、学生を“大学建設”の主体にすえた見方であります。これまた、当時の大学では、全く見られない観点でした。大学といえば、いわゆる“大学の自治”ということが強調され、国家権力に対する大学の自治が掲げられました。しかし、その自治の実態といえば、いわゆる教授会の自治であり、教員の自治であったわけです。大学運営のほとんどが“教授会”の名の下に行われ、実質的には、“教員”の権利を守ることが重視されてきた。こうなったのは、もちろん歴史的いきさつがあるわけですが、それでは非常に片寄り過ぎてしまっていたわけです。

そういう中であって、池田先生は、「創価大学は、学生の自治であり、学生が主役である」と、強調されたのです。

この考え方もまた、当時の大学というものの中であって、非常に先見性に富む捉え方であった、と思います。

#### ブロンズ像に建学の精神

このような池田先生の建学にあたっての構想の下、創価大学は、1971（昭和46）年4月にスタートするわけです。

1971（昭和46）年1月26日、文部省（当時）から大学設立の認可がおりたという、その報せを聞いた先生は、大変、喜ばれ、次ぎの2句を詠われました。

文明の 先駆の旗あり 創価大

揺るぎなき 教授に集う 創価大

この歌を先生は詠まれてから、さらに、次のように言われました。  
「創価大学は、一握りのエリートをつくる大学ではない。従って、早く4年間の軌道を作ったならば、次ぎは、通信教育を始めたい。そして、多くの学びたいという人に創価教育を、創大での教育を受けさせたい。たくさんの創大卒業生を世に送り出そう」

また、さらに、「創価大学の学生が、エリート集団になってはいけない。学生というのは、エリートではないのだ。また、学生は、皆といろいろなことをやっていく中で光っていくことが大事だ。エリート意識を持った人間は、必ず、失敗する。その反動が怖いのだ」。

先生は、創価大学の設立認可を喜びながら、このように将来の学生のあり方を語られました。それと同時に、先生は、「創価大学が八王子に出来た。不思議なことだ。八というは仏法では“開く”という意味だ。すなわち、八王子というのは、師子王の子が四方八方へと、全世界へと雄飛していく所なんだ。この八王子から、創価大学から、師子王の子が世界へと巣立っていくことは間違いない」。と、先生は八王子の意味を掘りさげながら、創大生の活躍を期待されたわけであります。

また、先生は、「ヨーロッパの大学を回ってきたよ。アメリカの大学も見えてきた。その結果、大学というものには、シンボルがなくてははいけない。なにか、大学のシンボルになるものが必要だ。そこで私は、一對のフランス製のブロンズ像を開学の記念に買った。フランスの彫刻家、ファルギエール・アルクサンドルの作ったものです。これを創大生に贈りたい。そのブロンズ像は、天使が笛を吹いて、空へ舞って行く。一方には、天使の下に印刷工がおり、もう一方の像では、同じく天使の下に鍛冶屋がいる。すなわち、天使は大空に羽ばたいていく。それは世界に雄飛していく指導者のことを意味している。また、理想、理念に生きる創大生の姿を表しているのだ。しかし、同時に、印刷工、鍛冶屋、そういう労働者の存在を忘れてはいけない。すなわち、台座の二人の労働者は、現実を表している。ブロンズ像は理想と現実、また、将来の大リーダーがどんな立場になっても、絶対に民衆のことを忘れてはならない、そのことの象徴なんだ。創大生には、どこまでいっても民衆のリーダーになって欲しい。民衆のことを思うリーダーである。そのことを忘れて欲しくない、という意味をこめって、ブロンズ像を贈ったんだよ」こう先生は言われました。

ブロンズ像には、そのような意味が込められているのです。

さらに、先生は、その像象の台座に、有名な指針を刻んで下されたわけであります。

英知を磨くは何のため 君よ それを忘るるな

労苦と使命の中にのみ 人生の価値(たから)は生まれる

じつに、大学のさまざまな象徴的な建造物の一つひとつに、創立者としての、池田先生の創大生への思いが深く刻印されているのです。

## 学生たちと絆を結ぶ創立者

1971（昭和46）年2月11日。快晴の青空の下、創価大学の竣工式が行われました。

先生は、その折りに、「創価大学は、楽しく、伸び伸びとした大学としたい。そして、社会の繁栄を担う、包容力のある人材を輩出して欲しい」こう言われました。

竣工式の後、S201教室からラーニング棟の方に向かわれ、LL教室とか図書館（当時、ラーニング棟の中にあった。）の一つひとつをご覧になりながら、先生は、「良いね。素晴らしいね。僕も入学させてくれないかな」と、冗談を言われながら、約2時間かけて校内をご覧になりました。

そして、その日の午後3時過ぎには、東京創価学園に行かれました。

そこでも生徒たちと卓球をされたり、食事を共にしながら、卒業間近の高校生たちに、「創価大学で待っているよ」と、激励をして下さったのです。

ところが、先生はさまざまな理由から、同年4月の第1回目の入学式には来られませんでした。「自分たちでやりなさい」と。

第2回の入学式にもご出席されませんでした。

開学当初の創価大学は、経済学部、法学部、そして文学部と、わずか3学部からのスタートでした。ことに第1回の場合は、当然、学生も1年生だけ、754名の入学式でした。その上、先生は、お見えにならない。先生を慕って集まった学生たちには、大変、寂しい入学式でした。

誰もが、先生のご来学を求めてやみませんでした。

その年の8月1日、創大の学生代表が、ある場所で、たまたま先生とお会いする機会がありました。その時、学生の1人が、「先生、大学にいらして下さい！」こう切り出しました。その時、先生は、即座に、「行くよ。私は、学生のためならば、学生の招待ならば、行くんだ」

そう言われ、「何があるんだ」と、聞かれたわけです。

言い出した学生も、思わず、詰まってしまいましたが、瞬間、彼は、「学生祭をやります！ 大学祭をやります！ 創大祭をやります！ ですから、ぜひ、来て下さい！」と言いました。

先生は、「分かった。行くよ。私は、学生の側に立つんだ。学生の招待ならば、私は行くよ」

そう約束されたのです。

それが実現したのは、1971（昭和46）年11月21日、「第1回創大祭」の時だったのです。

「ロマンと英知と表現と」とのテーマで開催された「創大祭」は、運営の役員をはじめとして、クラブの展示から模擬店まで、754名の学生の全てが、あらゆる役割を一人何役もこなしながら、それはそれは見事な大学祭をやったのです。

この時も先生は、地下1階から3階、4階ぐらいまでの展示場の一つひとつを、3時間以上かけてご覧になって下さいました。

ある展示会場に行ったところ、突然、学生が先生の前に、表紙に何も書いてない同人の文芸誌を差し出しました。「先生、この雑誌には、まだ名前がありません。名前を付けて下さい！」

すると、先生は、瞬間、パッとその白紙の同人誌をご覧になりながら、「うん、“無名”が良いだろう。“無名”にしよう。無名ほど強いものは無い。無名の指導者、良いじゃないか」そう言われて、その雑誌に「無名」という題名を付けて下さいました。

また、ある会場では、突然、学生が、「先生、イモ食べて下さい。美味しいですよ、このイモ」と言いながら、焼きイモが差し出されました。先生は、「そうか！」と言われて、そのイモと一緒に頬張られたのです。まさに、創価大学は先生の手づくりで、学生とともに建設しようとの真心からの行動で出発したのです。

また、これは、翌年の第2回創大祭の折のことです。「生命哲学研究会」の展示会場に先生が入られました。そこでは「イスラム教」の研究を展示していました。先生は、「イスラム教の研究か。大事だな。僕も今、この問題については、じっくりと考えているんだよ。21世紀は、イスラム教の時代かも知れないな」そう言われ、先生は、展示の一つひとつを丁寧にご覧になっておりました。私はその時、これからはイスラム教との対話は避けて通れないだろう、という先生の、これまた先見性に富む視点に、大変、驚いた次第です。

この問題に関連しますが、先生は「第2回滝山祭」（昭和48年7月13日）の時に、「スコラ哲学と現代文明」と題する「記念講演」を行って下さいました。そのスピーチを終えられた後、先生は、校内を回られながら、「今日の講演は、大事な話なんだ。創価大学の根幹をなすものなんだ」

そう強調され、「あと、もう一つ、僕が考えているのは、コスモロジー論である。ダンテの『神曲』に代表される生命論、そこから宇宙の本質にまで発展していくコスモロジー論の講演も、いつかやりたいな」と、言われました。

先生のその「コスモロジー論」は、去年（2000年）の「SGIの日、記念提言」の中で一部、展開されています。

ともあれ、このように、先生のお考えの中に、すでに開学の頃から、「イスラム教論」、「スコラ哲学」、そして「コスモロジー論」があったと考えていいでしょう。いわば20世紀

から21世紀における、大きな時代の思潮の大事な部分を適確に捉えられていたことに、目を見張る思いがしてなりません。

さて、「第1回創大祭」の展示場を回られた後に、先生は、体育館で開催されたフェスティバルに出席されました。学生による見事な催し物が終わった後、先生は、マイクを取られて次ぎのように言われました。

「日本で一番、小さな、小人数の学生祭かも知れません。苦労も多かったと思います。しかし、20年、30年先に、きっとこの努力が、偉大な栄光の華となって開くことは間違いありません」

さらに、「諸君は、日本にとっても、世界にとっても、人類にとっても掛け替えのない人たちです。ある意味では、先生方と対等であり、より偉大です。社会を革命していく尊い人なんです。私は、皆様方を一個の偉大な人格者として尊敬してまいります」

こう真心からの激励をして下さったのです。

一人ひとりが“創立者”たれ

先生と学生たちの絆が、ますます深まる中、やがて1期生、2期生たちの間から「学生歌」を作ろう、「寮歌」を作ろう、という気運がどんどん興ってまいりました。

そして、「第2回創大祭」の準備が進む渦中で、現在の「学生歌」(作詞・沖洋、作曲・川上慎一)が誕生しました。沖洋はペンネームで、本名は中村宏勝君と言いますが、彼が最初に作った詞は、実は、4番まであったんです。今でも1番、2番、3番を歌っただけでも長いわけですから、4番まで全部、指揮をとって歌ったら、本当に倒れてしまうぐらいの長編詩でした。その長かった詩を、私も参加させていただいて、現在のように3番に絞ったわけです。

それをお見せしたところ、先生は、  
「良い歌だな。良い詩だな。でも、少しだけ、手を入れさせてもらおうよ」

こう言われて、先生は、手を入れてくれました。

1番に、「白蝶あそこに 喜び舞いて」とありますが、元々の原詩は「白蝶一色 喜び舞いて」でありました。先生は、

「“一色”というのは、詩的な表現ではあるけれども、ちょっと歌っていると意味が分からない」と、言われました。“一色”というのは、蝶々が一匹という意味ですが、それを「あそこに」と変えて下さいました。



2番に、「燃えなんわが胸 正義の心」とありますが、元々の原詩は「義憤の心」でした。先生は、「この“義憤の心”も良いけど、ちょっと歌で聞くと意味がわかりにくい」と言われ、「義憤」ではなく“正義”と直して下さいました。

3番の原詩は、「沈黙(しじま)を破りて 太陽(ひ)は昇りゆく」でした。今は、その「太陽」は「朝日」になっています。先生は、「沈黙を破って日が昇って行くのだから、いきなり太陽ではなくて、まず、朝日にしようよ」と言われて、「沈黙(しじま)を破りて朝日が昇りゆく」となったのです。

その他にもありますが、先生は、「良い詩だ。良い歌だ」と、何回も言って下さいました。

また、「滝山祭」の前後には、各寮が一斉に「寮歌」を作りました。あの頃は、本当に詩人が多かったですね。先生は、いくつかの「寮歌」も聞かれながら、「うん、良くも悪くもないな」こう言われ、「寮歌というのは、皆で歌うものなんだ。一般の人も歌えなければダメだよ。色々なところの詩を持ってきて、つなぎ合せたものはダメなんだ。歌というのは、一回聞いて、これは良い、というように直接生命に入ってくるものでなければいけないんだ」

そう言われた先生は、学生の一つひとつの歌に対しても、ある時は厳しく、ある時は包容力をもって、いろいろな形で激励して下さいました。

そうしながらも、先生は、「基礎の勉強をしっかりやりなさい。頭を強くしなければいけない。これからの時代は人間学だ。人間学が大事だ。すなわち、知性と行動を兼ね備えた力を持たなければいけないよ」こう先生は指摘されました。

また、1期生、2期生に対しては、真心からの渾身の激励、指導を絶やさず、さまざまな話をして下さいました。

「1期生は、道なき道をつくってくれたんだ。私の友人としての立場であり、苦勞をかけた。しかし、人生を誠実と力でもって、また、知恵でもって切り開いて行ってもらいたい。この中には、建設の犠牲になる人がいるかも知れないけども、甘んじてそれを受けてもらいたい。だからと言って、不満を持つてはいけない。不満を持つよりも、自分が強くなるんだ。力をつけて境涯を上げるんだ。不満のある人は、いつまでたっても可哀想である。苦難を建設の跳躍台に変える、その決意で頑張ってもらいたい」こう先生は言われました。

ある学生には、「大学の栄えある主体者として、私と一緒に苦勞をし、永久に大学の礎になろうよ」

このように書いて下さいました。

「本当に苦勞している人、建設に励んでいる人は、私の苦勞が分かるんだ。建設の時とは、我慢、苦難の時なんだ」このようにも言われ、1期生に対しては、温かくも厳しい激励をされたのです。

以上、数々のエピソードを紹介してまいりましたが、一貫して先生は、「僕は、何時も学生の側に立つよ。だから、君たちもまた創立者なんだ。大学の創立者として頑張っ欲しいんだ」こう先生は言われました。

創価大学は、このような先生の学生に対する限りない激励と期待のもと、未来への大きな理想に向かって進んできたわけです。

大学は制度、建物では決まらない

ここで少し「大学」の本質というものを、先生のスピーチを参考に考えてみたいと思います。

「大学」とは、一体、なにか。大学の本質はどこにあるのか。大学というのは、英語で Universityと言いますが、その語源は、あまりにも有名な「ユニベルシタス」というラテン語にあります。これを英語の辞書で引きますと、「ユニベルスタス」とは、「society of teachers and students」とあります。すなわち、「教員と学生の集まり」こそが、「大学」なのです。

一橋大学の元学長で、阿部謹也先生という方がいらっしゃいます。ヨーロッパ中世、なかなか、ドイツ史の研究では、我が国ナンバー・ワンの先生です。その阿部先生は、『大学論』という本の中で、大学というのは、出来た経過としては、それぞれの大学によって違いはありますが、本質的には「中世の大学」にあります。それは、教会が聖職者を育成するために作った学校でありました、と指摘されています。

その学校では、学生たちが藁束を持って集まり、廊下の辺りに腰を下ろして、教師の話を聞いた。そこから「大学」が発した。つまり「大学」は、制度や建物から出来た物ではない。教師と学生の集まりの中から、大学は出来たのです、と阿部謹也先生は指摘をされておられます。

池田先生の“草創三部作”と言われる代表的な講演を拝見しても、先生は、大学というものは、教員と学生の集まりであって、建物や制度ではないとい、うことを一貫して何回も強調されておられます。

建設途上の昭和44年5月3日の、第32回「創価学会本部総会」の講演でも、先生は、創

創価大学のあり方として、2点言われています。1点は、「教授と学生の関係」についてです。それは、あくまでも先輩と後輩という民主的な関係でなければならない、ということです。2点目に、創価大学は学内の運営に関して、“学生参加”の原則を実現し、理想的な学園共同体にしていきたいと思います、と宣言されている。先生は、すでに開学の2年も前の段階で、今日の創価大学の根本精神を訴えられていたわけです。

この考え方は、実は、恩師・戸田先生が言われていたことでもあります。戸田先生は、池田先生によく言われたそうです。すなわち、

「学校というのは、学生で決まるのだ。学校というのは、学生で決まるんだよ。その学生は、本人の心掛け次第で、どこでも勉強は出来る。学問の力をつけていけるんだ。学生を育成することが、大学の評価を決めるんだ」

池田先生は、戸田先生の考えのその下に、創価大学はあくまでも“学生中心”という捉え方を述べられていたわけです。

先生は、あらゆる機会を通じて、大学の基本精神を述べられました。とくに第4回入学式で、先生は、「大学は、制度や建物から生まれたのではない。新しい知識と学問を求めようとする若者の情熱の意欲から興ったのである。真理を会得したいという若者の熱望がまずあって、それが教師を生み出し、この学生と教師との人間的共同体が大学の淵源である。大学とは、学問を求め、真理を愛する学生たちの熱誠から始まったのである」

こう訴えられました。

「従って、学生不在の大学となれば、大学の命は無い。さらに、学生こそ若き大学の創立者であり、創造者である」

このようにも叫ばれたわけです。「大学」というのは、学生が主役であり、主体である。こういう考え方に貫かれていたわけでもあります。そればかりか、先生は、学生がさまざまな大学運営にも参加していかなければいけない、ということも言われていました。

ところが、前回(2000年11月18日)の講演会で、篠原誠顧問も紹介されておられましたように、1972(昭和47)年、開学2年目の時に、大学の理事会が、授業料をどうしても値上げしなければならない、ということで、ほぼ完成に近い原案を、学生に提示したわけです。

それに対して、当時の学生たちは、大変、怒りました。彼らは、授業料値上げを怒ったわけではありません。先生が、あれほど大学運営には“学生参加”が原則と言っているながら、ややもするとそれを軽視してしまう、大学当局に対して怒ったわけです。

そうした経緯から、いわゆる「全学協議会」が出発しました。理事者、教員、職員、そして学生という4者の代表による共同討議機関です。これは昭和47年当時にとっては、他の大学にはあまり例の見られない、実に、斬新的なやり方であった、と言えます。

大学を構成する4者の代表が、互いの意見を尊重して物事を決していくという制度の中で、当時の学生たちは、この授業料値上げ問題に対しても、まるで新たな行動に出ます。大学経営の実態を知った学生の側から、何と授業料を値上げしてはどうか、ここまでにしてもらいたい、という動きが出てくるのです。世の中には、“授業料値下げ”を要求する学生運動はありますが、授業料を上げてもらいたい、という学生運動を興したのは、恐らく創価大学が初めてではないかと思うわけです。

このように、先生の、大学運営にあっては学生が主役である、という理念に従って、その後、入学式、卒業式、そして、さまざまな大学の式典などの運営には、必ず学生が参加するという、形態が出来あがってきたわけであります。

### 民衆を忘れず、創造的人間に

しかし、私は、もう一方では、先ほど、さまざまご紹介しましたように、“大学建設は、学生が主役”とはいっても、本質的にその意味するところは、やはり学生の中から、大学を背負って立つ力のある人材が出る、ということが大事だと思うわけであります。

そのことを示す先生の大きな叫びが、1977（昭和52）年4月10日、中央図書館の起工式の時にあったのです。

起工式の折り、先生は、はっきりと、「創大生は、学問の力で、～大学の学生に負けてはならない」

と、特定の大学名を名指しで挙げられて、学問の重要性を訴えられたのです。

さらに先生は、ある時、「創大生には、学問の力がない。そういう評価を受けるようになったら、もうお仕舞いなんだ」このようにも言われました。

じつに、“大学建設”をするということの本当の意味は、先生の大きな期待を担った学生が、将来、社会において大きく羽ばたくために、何としても学問の力を身につけることが大事ではないか、と思うわけであります。

そして、先生が“大学建設の主役”と言われるその学生像といえは、私は、3つのポイントがあると思うんです。

第1は、先ほど紹介させていただきました、ブロンズ像の指針にあります。将来、創大生はどんなに偉くなろうとも、あるいは世界に、社会に雄飛しようとも、決して、庶民を忘れてはならない、労働者の心を忘れてはいけない。民衆を忘れるようなことがあってはならない、という学生像があります。

第2は、“全体人間”たれ、ということでしょう。創大生は、全体人間でなければいけない。“全体人間”については、後日、あらためて詳しく論じようと思っておりますが、簡単に言ってしまうと、知性と行動が備わっている。また、理念と実践が一致している。そして、理想と現実が調和している。等々の人物を指します。いわゆる温かい心を持つと同時に、クールな冷静な頭脳を持っている。こういう人間としてのバランスがとれている、このような人物像を“全体人間”と先生は言われていると思います。

第3に、先生の期待する学生像には、“創造的人間”たれ、ということがあると思います。この“創造的人間”というのは、今、聞いても、決して古くない言葉であると思います。

何が人生にとって一番、大事なのか。それは創造的である、ということです。すなわち、自分の頭でしっかり考え、新しい物を常に生み出していく。そして、人類社会に貢献していくという、こういう創造性を培うということが、一番、大事なポイントではないか、と思うわけであります。

平和学で有名なヨハン・ガルトゥング博士が、1996（平成8）年5月、東京、関西の創価高校を訪問し、そして、創価大学で講演されたことがあります。

その時に、ガルトゥング博士は、オレンジの話をされました。ここに2つのオレンジがある。しかし、子供は3人である。この2つのオレンジを3人の子供に、どうやって分けるか、という問題が出されました。3等分して切れば良いではないか、ということを行う人がいるかも知れないけれども、それでは、あまりにも乱暴である。

さまざまなやり方があると思う。その2つのオレンジから種をとりどして、土に植える。水をかける。やがて芽がでて、木になり、花が咲き、オレンジの実がたわわになる。その時に、3人にたくさんのオレンジを分けることが出来る。こういうことも、一つの方法である。

また、違ったもう一つの方法は、このオレンジをジュースにかけ、そして、パン粉を入れて焼き、パンケーキにする。それを3等分して、3人に分ける。こういう方法もある。

3番目のやり方としては、その2つのオレンジを、近くにいた貧しい、可哀想な人にあげてしまう。そして、その人が喜んでる姿を見て、3人の子供たちは、自分たちが食べた以上に、喜びを分かちあう。そのことも一つの重要な問題解決の方法かも知れない。

このように、2つのオレンジを3人の子供にどうやって分けるか、というテーマ一つ取り上げてみても、その時その時に応じて、いろいろな方法がある。だから、創造的な解決方法を生み出して行くことが肝要である。“創価”とは価値創造のことですから、常に価値を創造していくことが創大生の使命であると思います、とガルトゥング博士は呼びかけ

られたのです。

私たちの人生も、考えてみれば、常に、苦難との戦いです。いつも、問題解決が難しい課題と取り組んでいくことが要求されます。また、皆さん方が、将来、国際社会や、あらゆる所に出て行った時、一体、仕事とは何かということを考えると、常に起こり来る難しい問題に対して、どうやって解決したらいいか。その問題解決の方法を見つけることが、すなわち仕事であると言えるわけです。

こういうことを考えますと、先生が「創造的人間たれ」と言われているのは、実に大事な、私たちの人生の生き方そのものを、指摘されているのではないのでしょうか。

“大学建設の主役”として、学生は、どういう人間になったらいいのか、先生のさまざまな話を伺いまして、以上の3点をあげられるのではないかと、思います。

このように先生は、開学の頃から、創大生に“大学建設の主役たれ”と言われ続けてられました。そして、先生はさらに、次ぎの2点も強調されておられたと思うのです。

第1に、ある時、先生はこういう話をされました。

「真の大学建設者とは、一つは、生涯にわたる母校愛を持つ人である。「イギリスの歴史学者トインビー博士と会った時、博士は開口一番、“我がオックスフォード大学を訪問してくれてありがとう”と言われた。奥様も、“我が母校・ケンブリッジ大学を訪問して下さいましてありがとう”と続けられた。あの年になられても、2人とも“我が母校を訪問してくれてありがとう”という、限らない母校愛を持っている」と、当時の学生に訴えられ、「本当の優等生というのは、生涯にわたって母校を愛し続ける人である。同じく、本当の優等生とは、生涯にわたって同窓の友を大切にし続けることの出来る人である」

こう先生は言われました。

第2に、ある人が先生に、「一流の大学とは、どういう大学のことをいうのでしょうか」と、うかがった時の答えは、「卒業生が社会に出て、実力を証明出来る大学、それが一流です。社会が“大したものだ”と認める。すなわち、社会に出て実力を発揮出来る人、そういう人を出すことである。大学というのは、卒業生の姿で一流か二流かが決まってしまう。大学を卒業した人が、政財界をはじめさまざまな分野で“大したものだ”と言われるようになる。卒業生の姿で、その大学が一流かどうかが決まるのです」と、言われました。

このように考えてくると、“大学建設”というのは、大学4年間だけで終わるのではなく、生涯にわたって、自分が社会でどういう立場になるか、どういう活躍をするか、どういう働きをするか、それによって決まると思うのです。

もちろん、私は、生涯、否、将来と言っても、結局は、毎日、毎日の学生生活の過ごし方、今の自分自身の生き方が社会に出てからの自分を決めるのではないかと、思います。

大学時代はだらしなかったけれど、社会に出たら急に変わった、という話も、確かに中にはあります。しかし、一般に体験談というものは、まれなもので、あまり無いから面白いのであって、やはり日常性というのは、継続するものと思います。

あまり束縛もなければ、枠組もない大学生活の中で、自分の意思でもって毎日の生活の仕方、あり方を組み立てていくことが出来るのが、皆さんの現在なのです。したがって、大学生活の時の自分の生き方が、社会に出た時の自分の活躍の根っこを形成するのではないかと、私はこう思うわけです。

すなわち、毎日の大学生活を充実させることが、自分自身を大きく伸ばす基盤になることであり、そうした人たちが社会で活躍する時に、創価大学は本当に一流の大学だと言われるようになるのではないかと信じております。

先生の言われる“大学建設”とは、在学中はもとより、大学を卒業した後も母校を愛し続けるということ、そして、社会で大きく貢献する人材になるということ、この2点も含まれます。“大学建設”とは生涯にわたって続くことになるのです。これが、本当の意味での主役としての学生の役割ではないかと、と思います。

### 崇高な理念を具体化する努力を

最後に、私には忘れられない思い出があります。

ハワイ大学の教授で、平和学で有名なグレン・ページ教授が、1980（昭和55）年12月11日、創価大学を訪問されました。教授は、講義をするために、大学正面から校内に入りました。その時、あの一對のブロンズ像をじっと見詰め、そして大学の建学の理念、3指針の説明を真剣に聞いておられました。

そして、学生への講義が始まった時、グレン・ページ教授は、最初に何と言ったか。「君たちは、創価大学の建学の3指針を聞いて、どう思いますか？ あなたは、どう思いましたか？ あなたは、何を考えましたか？」

一人ひとりの学生に聞いていきました。そして教授は、「私は、この創価大学に来て、あのブロンズ像をみ、そして“人類の平和を守るフォートレスたれ”との創価大学の建学の精神を聞いた時に、私がもし、生まれ変わり、創価大学生になることが出来たならば、私は大学卒業後、国連事務総長になろうと思いました。国連事務総長になって、世界の平和のため、また、飢餓、貧困問題等で悩む人のために貢献する人間になろう、そう決めました」

こう言いまして、さらに、「君たちは、理念を単なる理念として聞き逃してはいけません。その理念を聞いたならば、では自分は、どういう人間になってその理念を具体化しようか、実現しようか、そう考えなければいけません。この大学の理念は、あまりにも素晴らしい。池田先生の建学の精神は時代の先を行っています。それを考えると、あなた方の生きる舞台は、限りなく広がっていると言えます。どうか自分なりに、この建学の精神を、理念をどう具体化するか。それを考えて下さい」

グレン・ページ教授はこう言われました。

私は、教授のこの話を聞きまして、本当に反省いたしました。私たちは、日頃、建学の理念、建学の精神を、自分はどのような形で実現しようと思っているのだろうか。どのような形で具現しようと思っているのか。それを深く考えさせられた次第であります。

創価大学は崇高な“建学の理念”の下に、30周年を一つの区切りとして、次ぎの飛躍の時代に入るのではないかと考えています。

池田先生は、ある時、「大学さえ磐石ならば、私はあと10倍力を出すよ」

こう言われたことがあります。創価大学の基盤をしっかりさせることが、先生の世界적인戦いの舞台を、いやがうえにも大きく広げることになるのではないかと思います。そうすることが、私たちの舞台をも拡大することになるのです。その時にこそ、“師弟共戦”ということが実現されると確信いたします。

どうか、あのブロンズ像の、限りなく、限りなく、大空に伸び行く“天使”の像を思い浮かべながら、同時に、常に、庶民、民衆を忘れてはならない、という先生の指針を生命に刻み、次ぎの30周年たる60周年を目指して、共に前進をして行きたいと思います。

本日は、ご清聴、大変に、ありがとうございました。